

## 初級における『サバイバルタスク』の実践報告

発表者：井上 正子・岩瀬 理美・播岡 恵（ラボ日本語教育研修所）

### 1. はじめに

日本の日本語学校等で学ぶ初級学習者は学習時間が短いものの、日本で生活している以上、日本語を使わざるを得ない状況にあり、早い段階で日本語を運用する能力が求められている。そのため、日本語教育の現場でも積極的にタスク活動を授業に取り入れる傾向にある。だが、教室内だけのタスク活動では、現実の場面で適切な日本語を使う能力を身につけるのは難しい。

大学英語教育学会（2006）では、タスクには、意味伝達を通し、具体的になんらかの目的を達成するための完結性が必要だと述べている。さらに岡崎他（1990）では、タスクには、「教育的配慮」「言語学習を作り出すこと」「実生活」の3つの見方があると述べている。

これらを踏まえ、本稿の「サバイバルタスク」（以下、「タスク」とする）は、初級レベルの学習者を対象に、完結性が明確な課題を取り上げ、その達成過程において学習者が遭遇する場面で求められている言語運用能力を養うことを目的として実施した。

また、日本語学習の一環として「タスク」を実践するため、学習者は課題の達成に向けてどのような言語活動を行うのかに留意した。「タスク」の順序は学習した句型項目の順番や難易ではなく、「情報を得る」ことから徐々に「情報を発信する」ことを目標に配置した。

### 2. 実践内容

授業は、2012年4月から6月までの初級前半レベルで計5回、初級後半レベルで計7回実施した。初級前半レベルは、ベトナム人4名（男性2名、女性2名）、韓国人3名（男性2名、女性1名）、ミャンマー人1名（女性1名）のクラスである。初級後半レベルは、韓国人4名（男性3名、女性1名）、ベトナム人2名（女性2名）、タイ人1名（女性1名）のクラスである。

授業は1回135分を2日間（1日目は45分、2日目は90分）に分けて実施した。但し、「料理を作ろう」（表2）は、1日目45分、2日目180分で行った。1日目は教室内で学習者に課題を伝え、課題達成のための便利なフレーズを共有し、シミュレーション練習を行った。2日目は教室外で1日目に練習したフレーズを思い出しながら「タスク」を実践した（表1・2）。その際教師は、学習者の様子を観察した。また、学習者の状況に応じて助けを出すこともあった。

「タスク」実施後、学習者は感想文やレポートなどで課題達成の過程を振り返り、その成果について自己評価を行った。

表1 「タスク」課題及び行動目標と実践場所（レベル：初級前半）

課題	行動目標	場所
1) 買い物をしよう	大型店舗で店員から情報を得ながら買い物ができる	文房具店/ ドラッグストア
2) ファストフード店へ行こう	カスタマイズした商品を買うことができる	サブウェイ
3) 電子マネーを使おう	一定のサービスを受けることができる	セブンイレブン
4) 薬を買おう	自分の状況を説明することができる 条件を伝え、それに合ったものを買うことができる	ドラッグストア
5) 学校を紹介しよう	自分の知っている情報を外に向かって発信することができる	学内

表2 「タスク」課題及び行動目標と実践場所（レベル：初級後半）

課題	行動目標	場所
1) 買い物をしよう	大型店舗でフロアガイド等から商品の所在の見当をつけることができる 条件に合った商品を購入することができる	東急ハンズ
2) コーヒーショップへ行こう	カスタマイズした商品を買うことができる	スターバックス
3) ネットで調べよう	インターネットで情報を収集することができる	学内
4) 図書館へ行こう	所定の用紙を埋めることができる 一定のサービスを受けることができる	角筈図書館
5) 新宿を探索しよう	インターネットで情報を収集することができる その情報をもとに実際にその場所へ行くことができる	野村ビル
6) 料理を作ろう	自分の知っている情報を説明することができる 得た情報を元に再現することができる	マルエツ/ 教室内
7) 家電量販店へ行こう	大型店舗で店員から情報を得ながら買い物ができる 自分の欲しい商品の形状を説明することができる	ビックカメラ/ ヨドバシカメラ

### 3. 結果

「タスク」の活動を通じて、学習者は教師以外の日本人によるコントロールされていない日本語を聞いても怖がらずに情報のやり取りすることができるようになった。また、教師以外の日本人やインターネット、パンフレットなど様々なリソースを使って課題を達成できるようになった。そして、これらを実生活に応用している姿も見受けられる。さらに、初級でありながら、課題達成までの行動を学習者自身で振り返るようになった。

### 4. 今後の課題

現在、評価はタスクが達成できたか否かでしか行っていない。適切な場面で適切な表現が使えているかどうかは評価しやすいのだが、課題達成のために学習者がどのようなストラテジーをとっているのかという部分は評価にくい。このような言語運用能力をどのような視点で評価できるのか、現在検討中である。

参考文献：岡崎敏雄・岡崎眸(1990)『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社  
 大学英語教育学会・学習ストラテジー研究会編著(2006)『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』